児童サービス論受講生「私のお薦め本」より

飛　石　眞理子

はじめに

私が担当している司書資格取得履修科目のなかに、児童サービス論がある。その児童サービス論における児童サービスとは、図書館情報学用語辞典では「公共図書館が提供するサービスの中で，特に幼児から中学生 1 年生程度を対象とするもの，児童奉仕ともいう．幼児や児童は文字や本に初めて接する年代であり，この時代の体験が生涯の読書習慣の形成や図書館利用に大きな影響を及ぼすため，読書は楽しいもの，図書館は楽しい所といったことが体感的に理解されるようなサービスが必要とされる．具体的には，児童用コレクションの構築と運用，本の紹介や本選びの援助，また，ストーリーテイリング，読み聞かせ，ブックトーク，お話会など子ども向けの集会の開催や学級訪問などの行事があり，さらに特別な施設に収容されている児童へのサービス，団体貸出を始めとする子どもや文庫や親子読書への協力がふくまれる.」[1)]と説明している。

また、ニューヨーク公共図書館の児童図書館員の経験をもつ渡辺茂男氏は著書「幼年文学の世界」で、「児童図書館にやってくる子どもたち、母親たち、教師たちとわたりあうための一つの武器は、子どもの本についての知識だけ」[2)]と述べている。

以上から、司書資格履修において児童サービス論を学ぶと同時に多くの子どもの本を知ることは必要不可欠な事が認識できる。しかしながら現在の履修科目には､「児童資料論」「児童サービス演習」は設定されていない。そこで私が担当する児童サービス論 15 回の講義中に一冊でも多くの子どもの心に響く本を紹介するための良い手立てがないものか思案し、学生が

子どもの頃読んだ本の中から特に心に残った本を、受講生全員講義の中で紹介する事にした。

具体的には、毎回２～３人の学生がプロジェクターの画面を使い、お薦め本の「表紙」「あらすじ」「本との思いで」「お気に入りのページ」等を紹介して、学生達の推薦本のすばらしさを共有する方法をとっている。さらに紹介した本の書評を書く事も課題としている。この二つの課題をこなすことで、大まかではあるが、「読み聞かせ」「ブックトーク」「ブックリスト作成」の演習と位置づけている。

現在このリストが 406 冊となった。最も多く紹介された作家上位５人の作品一覧と、上位３人の著者の「学生と本との関わり」を通して子どもにとって心に残る本とはどの様なものかを考えてみた。

1：上位５人の作品一覧

第１位　　島田ゆか　　17 冊

バムとケロのおかいもの	文渓堂	5
バムとケロのさむいあさ	文溪堂	4
バムとケロのそらのたび	文溪堂	2
バムとケロのにちようび	文渓堂	2
パムとケロのもりのこや	文渓堂	2
うちにかえったガラゴ	文渓堂	1
かばんうりのガラゴ	文渓堂	1
	合　計	17

第２位　かこさとし　　13 冊

からすのパンやさん	偕成社	5
だるまくんとだいこくちゃん	福音館書店	1
だるまちゃんとかみなりちゃん	福音館書店	1
だるまちゃんとてんぐちゃん	福音館書店	1
だるまちゃん・りんごちゃん	端水社	1
おたまじゃくしの 101 ちゃん	偕成社	1
どろぼうがっこう	偕成社	1
まさかりさんがさあたいへん	小峰書店	1
かこさとしほしのほん　はるのほし	偕成社	1
	合　計	13

第３位　なかやみわ　　12 冊

そらまめくんのベッド	福音館書店	5
くれよんのくろくん	童心社	4
そらまめくんとめだかのこ	福音館書店	2
そらまめくんのあたらしいベッド	小学館	1
	合　計	12

第 4 位　いわむらかずお　11 冊

14 ひきのこもりうた	童心社	2
14 ひきのひっこし	童心社	2
14 ひきのあさごはん	童心社	2
14 ひきのぴくにっく	童心社	2
かんがえるかえるカエルくん	福音館書店	2
森からの手紙	いんなあとりっぷ社	1
	合　計	11

第 5 位　新美南吉　　9 冊

手ぶくろを買いに	偕成社	2
手ぶくろを買いに	ひさかたチャイルド	1
手ぶくろを買いに	フレーベル館	1
ごんぎつね	偕成社	4
ごんぎつね	ポプラ社	1
	合　計	9

中川李枝子　　同

ぐりとぐら	福音館書店	4
いやいやえん	福音館書店	1
かえるのエルタ	福音館書店	1
ぐりとぐらのえんそく	福音館書店	1
そらいろのたね	福音館書店	1
なぞなぞえほん	福音館書店	1
	合　計	9

7 位以下の著者

7 冊　エリック・カール　キヨノサチコ

6 冊　レオ・ブスカーリア　宮西達也　内田麟太郎　五味太郎

5 冊　長谷川摂子　佐野洋子　さとうわきこ　木村裕一　上橋菜穂子

4 冊　レオ・レオニ　マーカス・フィスター　林明子　馬場のぼる
トミー・アンゲラー　どいかや　せなけいこ

3 冊　わかやまけん　モーリス・センダック　宮沢賢治　古田足日
芭蕉みどり　谷川俊太郎　シェル・シルヴァスタイン
ジーン・マルゾーロ　菊田まりこ　あきやまただし

2 冊　32 人

1 冊　150 人

2：多く紹介された作者と学生書評

2－1

第 1 位　島田ゆか　17 冊

島田ゆか PROFILE

東京デザイン専門学校グラフィックデザイン科卒業。

食品のパッケージデザイン、書店アルバイトなどを経てフリーに。

1994 年 9 月に「バムとケロのにちようび」を出版。

カナダ、オンタリオ州在住。

作品「バムとケロシリーズ」「ガラゴシリーズ」「ぶーちゃんとおにいちゃん」「かぞえておぼえるかずのえほん」「ちいさな魔女からの手紙」

自身 HP より

学生の書評（要約）

島田ゆかの作品の書評は概ね、ユーモラスな画面に引き込まれたと評されていた。詳細に描かれた背景や、お話に関わる小動物達、道具、食べ物に夢中になったり、同時に「次々におこるハプニングに、ワクワクとした。」

と推薦してあった。そこで学生達を最も魅了した作品の書評から絵について書かれた個所を抜粋した。

学生書評より抜粋

「バムとケロシリーズ」より

・隠し要素の小さなキャラクターもいるのでその拘りを探しながら読むのも楽しかった。
・ストーリ内に出てくる家具と雑貨が可愛いらしくてこんな家に住めたらと思っていた。
・ページの隅々まで描き込またキャラが生き生きと描かれおり、何度読んでも新しい発見があった。
・どれもこれも可愛くて、ページの隅々まで眺めて、ページをめくるのに時間がかかった。
・バムとケロ以外にもたくさんの個性豊かなキャラが絵本の中に多数ちりばめてあり、その絵を探すのがたのしかった。
・文字が読めない頃に出会い、絵が魅力的で特に食べ物のイラストに興味を持った。
・文字が読めない頃から細部まで書き込まれた絵やおいしそうな食べ物を楽しめた。

「ガラゴシリーズ」より

・可愛く面白いカバンをみて楽しくなった。
・絵の細かいところまで書き込んである。

以上の文章は、細かな拘りを持った絵の評価である。また、この本の絵をコミュニケーションツールとして妹弟や家族中で楽しんだとのコメントが多かった。文字の読めない頃から楽しみ、更に現在もこの本をちょいちょい楽しんでいるとのコメントもあった。

島田ゆかは、自身の絵本の絵について「細かく描くのは、もし自分が読む方だったら棚の中に何が入っているか詳しく見たい、引出しの中も見たい、お店には何が並んでいるのかもよく見たい、同じ絵や置物が何度もで

てくるなら少しずつ動いていた方が楽しい、そんな気持ちからだと思う。柔らかい物は柔らかく、硬い物は硬く見えるように描きたい。唐突に物事がおこらないように、そこに至る過程もちゃんとわかるように描きたい。そんな感じでどんどん細かくなってしまう。」[3)]と述べている。この事は、どのように読者に関わるのだろうか。

鈴木穂波（児童文学研究者）は「丁寧に細かく描きこまれたものそれぞれに、作者の愛情が感じられる。お気入りのもので満たされたバムとケロの家は、バムとケロ、そしてそれを作り出す著者にとって居心地がよく、安らげる場所であると共に、読者をこの絵本に迎え入れ、積極的に関わろうとさせるものになっている。」[4)]と解説している。上記の学生書評からも、この絵本の絵に積極的に関わっている様が分かる。「食事の場面は、味覚の表現とも関わってくる。食べ物が並んでいるだけでなく、実際に食べる場面が描かれていることによって、ドーナツを食べたときのさくっとした触感や、プリンの柔らかな舌触りや甘さが想像でき、その味覚を想像させる。そして、その味覚に訴える表現は、仲間に囲まれた暖かな雰囲気と共に読者に喜びをもたらすといえる。」と述べている。

学生の書評の中に「でてくるおやつにとてもひかれていた記憶があります。このお話ではドーナツがでてくるのですが、型抜きをして油にほうり込むだけでドーナツが出来ると思っていた。この本を読んでからおやつがドーナツだと嬉しかったことを覚えています。」と喜びを書いていた。

また、作者島田ゆかは「絵本の中にはテーマやメッセージを含んだものがあるが、私の絵本にはそれが無い。ただ単純に楽しんで欲しいと思っているので、私の絵本にはテーマやメッセージが必要ないのだ。対象年齢もほとんど考えていない。文章がすべてひらがななのは、子供からよめるようにということで、けっして子供用という意味ではない。」[3)]といっているが、書評の全てに楽しい絵本であることが書かれていた。また著者は「読んだ後に「絵本っていいな」と思えるような、そんな絵本を作っていきたいと思っている。」[3)]と言っている。その気持ちは、「現在もこの本をちょ

いちょい楽しんでいる。」とのコメントからも充分に知る事ができる。以上島田ゆかが、絵本に託した思いは、学生達の心を豊なものに育んでいた事が伝わってきた。

2－2

第２位　　かこさとし　13 冊

かこさとし PROFILE

1926 年現在の福井県越前市に生まれる。東京大学工学部応用化学科卒業。工学博士。技術士（化学）児童文化の研究者でもある。現在は、出版を中心に幅広く活躍。作品は『からすのパンやさん』を代表する「かこさとしおはなしのほん」シリーズ、『うつくしい絵』、「だるまちゃん」シリーズ、『とこちゃんはどこ』、「かこさとしからだの本」シリーズ、『伝承遊び考』など 600 点余。2008 年菊池寛賞受賞、2009 年日本化学会より特別功労賞を受賞。（注 2018 年 5 月 2 日 92 歳没）

かこさとし公式サイトより

学生の書評（要約）

丁寧に細部まで描かれた絵や、言葉のリズムを楽しむことができた。また、だるまや天狗などのキャラクターを通して温かい眼差しで物語が進み夢中になった。科学の話や物作りの楽しさをテンポよく伝えて興味を持った。

学生書評より抜粋

『からすのパンやさん』より

・お薦めは、見開きのページに沢山のパンが描いてあるシーンです。楽しい形をしていて、見ているだけでお腹が空いてきます。カラス 1 羽カラス 1 羽の色や柄が違っていてとてもこだわりを感じた。
・見開きにいろんな種類のパンがいっぱい描かれていて、そのページにとてもわくわくしたのを覚えています。他のページもかこさとしさんのやさしい絵のタッチで、細かいところまで描かれており、何度読んでもわくわくできて、心が温かくなる一冊だと思います。

・たくさんの可愛いパンが登場してわくわくする。みんなに嫌われがちのカラスもとても可愛く描かれている。
・見開きでページいっぱいに沢山の種類のパンがあって、見ていて飽きませんでした。おいしそうで「こんなパンがあったらな」と思いながら見ていました。
・たくさんのカラスがパンを買いに来て、買う個数ごとに列を分けてパニックにならないようにするシーンがありますが、子どもながら頭良いなと感じたのを覚えています。

『だるまくんとだいこくちゃん』より

・絵本の文章は全て平仮名で、大きな文字で書かれていることもあり、平仮名がよめるようになった 4.5 歳頃から自分でも読んでいました。
・こづちやこづつを振る時のかけ声も印象的で、私は好きでした。
・言葉選びや淡い色使いで華やかな絵、ねずみやあり、すずめも描かれている点も楽しめると思います。

『だるまちゃんとかみなりちゃん』より

・シリーズ全体を通して、絵の細かい所を見るのがとても楽しい本です。
・かみなりちゃんの住む町には何でもツノが生えており、「こんなものにもツノが生えている！」と発見する楽しみがあります。
・英語版だとおみやげのクッキーに対してのセリフ「This cookie has horn ！」が追加されていて面白いなと思いました。

『だるまちゃんとてんぐちゃん』より

・だるまちゃんの表情がよく変わりますが、それがとても個性的でとくに怒った顔は迫力もあり、なおかつ可愛いくてオススメです。
・絵も丁寧で、すぐに続きを読みたくなるのに、同じページをずっと見ていたくもなります。

『だるまちゃん・りんごちゃん』より

・文中には方言が使われていてとても温かみを感じお気に入りの一冊です。

『どろぼうがっこう』より

・「♪ぬきあし　さしあし　しのびあし　どろぼうがっこうのえんそくだ」歌のようにリズミカルなところが口ずさんでいて楽しかったのを思いだします。

『おたまじゃくしの 101 ちゃん』より

・絵本の中で最も印象的だったのはザリガニが登場するシーンです。それまで、1 匹の生物で見開きページを使うということがなかったので、その迫力に圧倒されました。

『まさかりどんがさあたいへん』より

・道具たちの表情、文章のテンポの良さ様々な道具が登場する絵図的面白さが心を捕らえた。

『かこさとしほしのほん　はるのほし』より

・天文分野の理科の苦手意識を除くことができた本。社会と理科が昔話でつながることが当時の私にとって衝撃的だった。

かこさとしは「からすのパンやさん」（1973 年 偕成社）のあとがきに、「個々の生きた人物描写と全体への総合化の大事なことを、私はモイセーエフ（欄外注）から学び、さて、からすの一羽一羽に試みてみたのがこの作品です。どうかそんなわけですので、もう一度カラスたちの表情を見て笑ってください。」と記載している。

見開きいっぱいにたくさんの種類のパンが描かれているページは、どの学生の心にも焼き付いている。この多種のパンはからすの子どもたちのアイディアから焼かれたもので、個性豊かなパンはお客の要求に応えるパン屋さんのメニューであると同時に、個々の生きた人物描写と全体への総合化として、幼い学生達の心を捕らえたのだろう。

絵本作家のヨシタケシンスケも「あのたくさんのパンの見開きがなかったら、絵本が好きになっていなかったかもしれないし、絵本作家になってなかったのかもしれません。あの色々なパンを毎日頭の中でたくさん食べて、僕は大きくなったのです。」[5)]と述べている。

だるまちゃんシリーズの誕生の秘話として「当時はいわゆる戦後なものだから、日本的なものは国粋的だと思われると、無国籍というどこの国かわからない夢物語みたいなお話ばっかりがあったんですが、やっぱり僕は日本の子どもたちがしっかりとしてはほしいので、日本の郷土玩具で同じようなものを描いてみようと思って。それではじめは主人公をてんぐちゃんにしたんだけども、てんぐにするとね、ピノキオと間違えられちゃたらつまんないと、それでだるまちゃんにしたんです。」[5)]と語っている。その思いは、学生のコメントに「こづちやこづつを振る時のかけ声も印象的」「文中には方言が使われていてとても温かみを感じ」等打出の小槌や方言から日本の文化を心の中に育んでいた。また、ホームスティ先で、「だるまちゃんとかみなりちゃん」紹介し楽しんでもらったと思い出を、紹介した学生もいた。だるまちゃんシリーズから日本文化を感じとっていた賜物であろう。かこさとしが日本文化を子ども達に伝えたいという「だるまちゃんシリーズ」に託した思いが、子ども達に届き、心を豊かに育てていた。また、だるまちゃんに託した生き方は「いい子というのは大人の喜ぶような子じゃなくて、ときどき失敗やいたずらもするプチ悪の面も持っていると、そういうプチ悪を、いろんなことをやりながら自分で乗り越えていく、そんなかしこさを持った子になってほしい。」[5)]とかこさとしは語っている。

「どろぼうがっこう」「おたまじゃくしの 101 ちゃん」は言葉のリズムや絵の迫力が心に響いたのは、かこの著書「未来のだるまちゃんへ」で「はじめは考えなしにやったっていい。しくじることも、あるだろう。だけど、しまったと思ったら、次は考えろ。自分でよく考えて、自分をちょっとずつ変えていけばいい。そうして、失敗を乗り越えてゆけるのが人間で、君もその一員なんだよ。僕はそう伝えたいのです。」という思いが、当時子どもであった学生達の心に響いたと思う。

かこさとしホームページ開設にあたりとして（kakosatoshi.jp/profile/）2016/4/25 に「専門の応用化学分野で博士号も持ち、科学者の目も持つかこさとしの著書は、絵本や物語にとどまらず、自然科学（かわ、海、宇

宙）建築・土木、歴史、さまざまな遊び、食べごと、四季おりおりの文化、地域資源などを融合した独自の視点と世界観を持つもので、子どもたちのいろいろな好奇心を満たすべく幅広いジャンルに及びます。また、内容的にも 20 年後、すなわち、子どもが大人になったときでも通用する専門性の高い、本格的なものです。」と公開されている。「まさかりどんがさあたいへん」の学生書評には「この絵本は「作ること」の楽しさを教えてくれた。」と綴られていた。

「かこさとしほしのほん　はるのほし」のあとがきには、「外へ出て春の大三角形や、スピカの星をみつけて、星を好きになってください。」と書かれていた。この本を読んだ学生は「天文分野の理科の苦手意識を除くことができた。」と書いていたので、当然星が好きになった事だろう。

かこさとしの世界は、「子どもたちの面白いというものの本質化、表面的でなく、真の願いを望んでいるものを、謙虚に分析をするということが、児童文学やよき子どもたちの作品創造の基礎に必要ではなかろうかと思っております。」[6]という考えに基づいて展開されていると思う。悪ガキ達のちょい悪の部分を寛容に見つめ、物事の真実を理解できるように絵本で、丁寧に伝えた作品の数々が子どもの心をしっかりとキャッチしていた。

2—3

第 3 位　なかやみわ　　12 冊

なかやみわ PROFILE

1971 年埼玉県生まれ。

女子美術短期大学卒業。

キャラクターデザイナーとしてサンリオに勤務、後にフリーに。

ワークショップなどで学びながら制作した「そらまめくんのベッド」（福音館書店）がデビュー作。東京在住。[7]

学生の書評（要約）から

それぞれ性格の違う個性を持つキャラクター達が自分以外の個性を活かす様が、可愛らしい絵柄で淡々と描かれ心うごかされた。登場人物が、仲間にも優しく協調できるようになるまでが温かな眼差しで描かれた作品と推薦されている。

学生の書評抜粋

「そらまめくんのベッド」より

・日常的に起こる出来事を題材にしています。その中で誰かの優しさに触れたり、自分が誰かの為になったという喜びを知ることで、人に優しくする大切さに気付ける。その優しさをそらまめくんと仲間の会話や彼らの表情、絵の温もりで感じることができます。
・幼稚園で先生が読み聞かせして下さった絵本の中で一番お気に入りでした。この本には色んな種類の豆が登場します。豆やそのサヤの形の大きさ色にそれぞれ個性があって面白いです。
・三歳くらいの子どもたちにとって自分の大切なものを誰かに貸すというのは大きな成長です。そんな日常生活の些細な成長を描き、学べるこの本はすごくお薦めです。
・この作品はコミュニケーションの基本となる「かして」「いいよ」が重要なポイントで保育園では身近なお話になっていて、子ども達に共感してもらいやすいストーリではないかと思います。イラストも色エンピツ画のように美しくてかわいい。

「くれよんのくろくん」より

・かわいらしい絵柄と最後の驚きのアイデアによるクレヨンたちの絵は、見ていてとても楽しくなります。くろくんはどんなことでもすばらしい能力に変わるかもしれないということを教えてくれる。
・保育園の頃黒色（クレヨン）だけは、余っていました。この絵本を親に

読んでもらって、「黒色はこうやって使うんだ！」と一時飽もせず、ずっと同じような絵ばかり描いていました。仲間外れはしてはいけない。みんなで仲良く遊ぶという事を学んだ。

・クレヨンたちの描く絵が無邪気で可愛らしい。クレヨンの色が違うように、表情や仕草が少しずつ違うため、とても個性的でクレヨンの 1 本 1 本に注目したくなる。

・初めはいらないと言われた黒クレヨンが最後に他の色を際立たせる夜空になることが感動させられます。内容も簡潔でよみやすい。

「そらまめくんとめだかのこ」より

・そらまめくんが自分の大切なものをめだかのこのために使う様子がとても印象的です。

・最初のほうはそらまめくんが自分のベッドを濡らしたくなくて非協力的なところが嫌いだったのですが、読んでいくうちにそらまめくんが進んで自分のベットを使わせるところで毎回すきになっていました。

・まめくんたちにはみんなそれぞれのベッド（皮）があり、他の人のベッドには入れたとしても、自分のベッドに比べて窮屈だったり、大きすぎるなどまめそれぞれにピッタリのベッド（皮）があることを改めて知ることができることです。

以上学生の書評から、個性を尊重し仲間と協調する様が学生の心に残ったことが窺える。

なかやみわは、作品を生み出すときに「日常で、「嫌だな」ということがありますよね。こうゆうことはすべきではないのに、なぜこうなってしまうんだろうと思ったときに、このキャラクターはどうするのかなと考える。お話の軸に私が生活の中で感じたことや伝えたいことがプラスされていて、動いてくれる役者としてキャラクターに任せるという感じです。」[8)]と述べている。作品で伝えたいテーマは日常生活から生まれている事が窺

える。「そらまめくんのベッド」の学生達のコメントにも「日常に起こる些細な出来事が題材にしてあり、お話に共感がもてる」との感想が書かれていた。またキャラクター達に対しても「温もりやそれぞれの個性が色エンピツ画のようで美しくて可愛い。」とその魅力を評価している。

なかやは自作「くれよんのくろくん」に対する思いを、「友だちや仲間って宝物」と題して、「くろくんのお話は友だちの優しさや大切さがベースになっています。小さな子が集団の中に入ったとき、すぐには受け入れられるか排除されるかは子どもにとっては重大な問題です。子どもは未熟ゆえに、自分と違うものを本能的に拒絶してしまうことがあるのだと思います。そんな子どもたちに、どんな色にも良さがあることや自分の色を大事にすることを伝えていけたらと。」[9)]と自作をかたっている。

「くろくんはどんなことでもすばらしい能力に変わるかもしれない。」

「仲間外れはしてはいけない。みんなで仲良く遊ぶという事を学んだ。」

「クレヨンの色が違うように、表情や仕草が少しずつ違うため、とても個性的でクレヨンの 1 本 1 本に注目したくなる。」等、なかやの思いがその作品から子どもの頃の学生達の心に届けられていた。

なかやの作品のキャラクター達は、学生のコメントに「そのさやの形の大きさ色にそれぞれ個性があって面白いです。」とある。それぞれのキャラクターをほのぼのとした感じで擬人化し、優しいトーンの色彩で癒しの空間を作りだしている。そのキャラクター達は前記した様になかやが生活の中で感じたことや伝えたいことがプラスされていて、役者としてなかやの代弁を任せられている。それ故に日常の中での問題が身近に感じられるのであろう。新作の「そらまめくんのぼくのいちにち」に託したメッセージとして「子どもは残酷な部分もあります。「嫌いだ」って平気で言うし、意地悪もすれば、仲間はずれもする。でもそれはしょうがないこと。何かの拍子に仲間の気持ちがひとつになったり、楽しめたりすることもある、そんなことに気づくきっかけに、この本がなってくれたらいいですね。」[10)]と述べている。かこさとし同様になかやも子どものプチ悪を否定せず、そ

の部分に気づいてくれれば良いとコメントしている。日常のトラブルから、他者を認める事、他者と共感して豊な人間関係を得る事をなかやは、望んでいる。そうしたなかやのメッセージは、学生達の心に届いていた事は、書評からも伺えた。

3：心に残る児童書

子どもの頃に心に残った本に限定し書評を書いてもらっているが、小学校入学以前の本が多い。社会生活を認識し始める 4 歳から 6 歳頃の感性の鋭さを感じさせられた。

学生達の紹介文を読んでいると、推薦本がコミュニケーションツールとして豊な人間関係を築いたり、本の世界の出来事と自分の日常の生活を客観的に見つめて心を豊に育っていた様子が窺えた。物語の本のみならず知識の本は、子どもの知的興味を誘導して、情報提供し知的好奇心を満たしていた。こうした本を思い出として心に残す事ができた学生達の恵まれた読書環境に感謝したい。将来図書館の児童担当司書に就いた時に、自分達が育った豊かな環境を忘れずに来館する子ども達に、そうした環境を提供して欲しいと願っている。大人になると作者のメッセージを深読みして、単純に本を楽しめなくなる傾向が窺えるが、学生達の心に残った本とは、心に満足を与えた本であった。

推薦本の著者一覧でも分かるが、紹介された作品が 1 冊又は 2 冊の著者がおおよそ半数であった。これは全ての一人一人の子ども達のグレードやその時に置かれた環境から生まれる心情等と、ベストマッチできた結果である。十人十色その時その時のグレードや心情に合った本をいつでも選べる環境こそが、心に残る本の提供に繋がる。いずれの絵本・児童書も子どもの心を豊にし、一生の思い出となる可能性がある。大人の目線と子どもの目線の違いを充分に把握し、子どもの意思で自由に本を選べる環境を心がける事で、子どもにとって心に残る本を一冊でも多く提供できる。心に残る本とは、その時その時の子どもの心の動きに合った、心を満たして

くれる本である。

公立図書館の児童室には、基本図書のみならずあらゆるジャンルの本を揃え子ども達の来館と貸し出しに備える事が必要である。

更に、細かなグレードに沿った選書は特に重要であるが、予算の問題上広く深い選書が無理なら、広く浅く蔵書を整えておきたい。

子どもが更に踏み込んだ資料を望むならば、その子のグレードや好奇心に寄り添い希望に応える様にすればよい。そこで購入希望や相互貸借等大人と同じサービスを活用して、より充実した細かなサービスを行う事で環境を整えたい。司書の目利きのみならず、ベストマッチングを実現するこうした環境こそが、心に残る児童書を全ての児童に届ける事ができると思う。

参考資料

①図書館情報学用語辞典第 3 版日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編 P96
② JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ児童サービス論　堀川照代　日本図書館協会編 P9
③絵本学会機関誌「Bookend」2002.12「絵本のこと、私のこと」
④絵本学会研究紀要「絵本学」（14）2012「島田ゆか「バムとケロ」シリーズにおけるインタラクティブ性」
⑤月刊 MOE2017・3「だるまちゃん 50 周年記念 かこさとし 絵本大博覧会」
⑥子どもの文化 1970 年 3 月号「私の児童文化論」
⑦この本読んで！ 2009 秋号「こんにちは！絵本作家さん」
⑧新刊展望 2003.11「絵本に思いをこめて」
⑨月刊 MOE 2018.4「なかやみわ自作をかたる」
⑩本の窓 2006.8「絵本は教養」

注　モイセーエフ

ロシアに、モイセーエフ舞踏団というのがあります。数多くの上演内容と伝統をもつ、優れた舞踏団ですが、その演目のひとつに組曲「パルチザン」と言うのがあります。長途につかれ馬上に眠りながらの行進、索敵、斥候、待ちぶせ、銃撃戦、味方の負傷、突撃、勝利、そしてまた次の敵を求めて荒野に消えてい

くパルチザンの情景が、詩情豊かに息もつかせぬ民族舞踊でつづられた作品でした。私はそのみごとな内容に、芸術的な香気にうたいあげたすばらしい演出よりも、そこに登場する兵士・農民・労働者・老若男女の一人ひとりの人物描写が、こころにくいまでに人間的なふくらみとこまかさで舞踏的にえがきつくされていることに、ひどく心をうたれました。（かこさとし著「からすのパンやさん」あとがきより）